

# 「中国で急増するロシア産玄ソバ輸入と我が国市場への影響」

江戸ソバリエ、江戸(旧寺方)蕎麦研究会

代表 小島末夫

ロシアと中国の両国が、世界の二大ソバ生産国（全体の7割前後を占有）であることはつとに有名であり、皆さまもよくご存知のとおりです。

こうした中で、昨2023年の動きに焦点を合わせますと、世界のソバ市場において大きな特徴として一つ指摘できるのが、中国によるロシアからの大幅な玄ソバの輸入増加という事実であります。この特筆すべき出来事について皆さまは既にお聞きになったか、あるいは把握されておられましたでしょうか？

このほど2023年の主要国に関わる貿易統計が概ね出揃いましたので、これを機に入手可能な輸出入データに基づき、最近の玄ソバを巡る内外動向について調べてみました。その結果、上記のほかにも大変興味のある事柄が判明しましたので、ここにご紹介しながら皆さまのご参考に供したいと思えます。何らかの形で情報共有に少しでもお役に立てれば幸いです。

## 1. 中国国内で急拡大するロシア産玄ソバ

表1 中国の対ロシア玄ソバ輸入（2019～23年）

年	輸入数量（トン）	トン当たり単価（人民币元）	
		対前年比（%）	→キロ当たり単価（円）
2019	36,505	33.3	1,842 (29.08)
2020	3,189	-91.3	2,264 (35.05)
2021	27,528	8.6倍	3,643 (62.01)
2022	15,926	-42.2	3,624 (70.63)
2023	124,101	7.8倍	3,176 (62.97)

注：人民币元/円の為替レート換算では、当該年の年間平均レートより算出。

資料提供：上新貿易株式会社

まずは表1をご覧ください。これは、コロナ前の2019年まで遡り、中国がロシアから輸入した玄ソバの過去5年間にわたる取引状況と価格の値動きを表したものです。具体的にはその5年間の推移を3つの局面、すなわち1つ目はコロナ前の2019年、2つ目は新型コロナウイルス禍の2020年以降、3つ目はロシアによるウクライナ軍事侵攻のあった2022年以降、に分けて表示しております。

同表を見ると明らかなように、中国の対ロシア玄ソバ輸入は、過去5年の間

に発生したコロナ禍やウクライナへの軍事侵攻などに伴って、その局面ごとに大きく変動している様子が読み取れます。なかでも特に目立つのが、2023年に同輸入量が一気に激増し年間12万トン余り（前年比7.8倍増、コロナ前の2019年と比べても3.4倍増）へと急上昇したことです。この12万トンという数値を聞いただけでは、あまりはつきりとしたイメージが湧かないかもしれません。だがその規模は、我が国の最近の年間平均生産量である約4万トンの3倍にも匹敵するものなのです。

ところで、去る2月24日、ロシアがウクライナへの全面侵攻を開始してから、丸2年の歳月が経過し遂に3年目へと突入しました。この間、当初の2022年こそ西側諸国による対ロ制裁措置の影響を受けて、ロシア経済はマイナス成長を余儀なくされたものの、翌2023年のGDPは反動増の要因もあり前年比3.6%増とプラス成長に回復しました。ではロシアとウクライナの間での戦況はどうなっているかと言え、ご承知のとおり依然として今なお膠着状態が続き、終結の見通しさえ全く立っていないのが現状です。

このような状況下で、ロシア、中国、アメリカ、日本の4カ国の例だけを取り上げてみても、貿易の様相は以前と比べ一変し、この2年間でがらりと変わりました。すなわち、ロシアと日米など西側諸国との貿易が細った反面、一方で顕著なのは経済面で接近する中国との貿易では、人民元決済も広がり輸出入ともに最高値を更新するなど大幅に伸びたことが分かります。例えば、中露（ロ）間の貿易総額は2023年に前年比26.3%増の2,401億ドル（約35兆円）に達し、両国が2019年夏に掲げた「2024年までに2,000億ドルの大台へ倍増」という目標を1年前倒しで実現したのでした。両国とも、対米関係が“新たな冷戦”の到来と言われるほど一段と冷え込むなか、利害一致のもとに相互依存を一層深めつつ更なる連携強化が進んでいる姿が如実にうかがわれます。

これに対して中国は、世界のサプライチェーン（供給網）における脱中国の動きが本格化する下で、ウクライナ侵攻で米欧日など主要先進7カ国（G7）より金融制裁を受けるロシアから、原油や天然ガスといった一次エネルギーのほか、先に述べた如く玄ソバの輸入をも急増させているのです。この背景としては、中国からの需要の高まりとともに、ロシアの玄ソバ生産の増加を軸にした輸出余力の拡大や価格低下などの要因が挙げられます。実際、ロシア連邦統計局から公表された暫定速報値によると、2023年のロシア全体における玄ソバの収穫量は148.5万トン（前年の122.2万トンより21.5%増）と見込まれ、例年レベルの100万トン程度の水準をかなり上回っていることが分かります。ちなみに、同播種面積については前年と比べ15万ha多い129.3万ha。そのうち玄ソバの主産地である西シベリア地区のアルタイ地方では、昨年の暑さと干ばつにもかかわらず、同収穫量が84万トン（全国シェアで56.5%。前年は74.1

万トン) を記録したと報告されています。そのため、世界一のソバ生産を誇るロシアは対中国のみならず、後で述べるように日本へも輸出攻勢を強めているものと思われます。ロシアのウクライナ侵攻で、一時はロシア産玄ソバの供給が滞るのではないかとの見方も浮上しましたが、それも結果的には杞憂に終わった感じです。

他方、入荷先の中国における玄ソバの生産状況は一体どうなっているのでしょうか？手許に必ずしも十分な資料を持ち合わせていませんが、以下に少し触れておきます。

中国では近年来、米国との貿易摩擦の激化を受け、従前より対米依存の高かった大豆やトウモロコシなど主要農産物の自国生産を強化しており、ソバからの転作が一段と進んでいます。そのため、現地から伝えられる関連情報によれば、中国産玄ソバについては、主産地である内モンゴル自治区の東部・西部地区を始め、山西省や西北部地区でも、確かにソバの作付面積が相対的に減少して伸び悩み、干ばつなどの影響も被ったとのこと。とはいえ、ソバの収穫量としては大幅な落ち込みが見られないことから、想定値と比べればそれほど悪くはないようだとの報告がなされています。こうして2023年の中国産玄ソバ生産は、全体的には減産した2022年とほぼ横ばいの水準に上るのではないかと推測されています。また価格の動きに関して付け加えるならば、上述したように中国国内にはロシア産玄ソバの輸入物が溢れているため、価格自体は総じて下落傾向にあると言われます。この点は表1からも容易に見当が付きまします。つまり、2023年における対ロシア玄ソバの輸入単価を見ると、トン当たりで前年より1割以上安い12.4%減の値段で売買されております。

## 2. 外国産玄ソバの値下がりと対照的な国産玄ソバの高値

次に以下では、我が国の玄ソバを巡る国内市場の動きについて述べてみたいと思います。

これまで一般的には、国内で消費される玄ソバのうち実に約8割が中国やアメリカ、ロシアなどを中心とする外国産であり、残りの2割程度が国産であると長らくみられてきました。従って、玄ソバの自給率としては、わずか2割前後に止まるとされてきたのです(注：食糧自給率は直近で約38%)。

こうしてソバ(乾燥子実)の需給動向から捉えると、その大半が海外品で占められ、そば粉の原料の多くを輸入品にずっと頼ってきたこととなります。このような状況は敢えて申すまでもなく、現在に至るも基本的に変わっておりません。ただ、我が国におけるソバ生産の最近の変化を踏まえてみると、年号が新しく令和に改まった2019年頃より全国のソバ収穫量は年間4万トンを超す状態(ちなみに、それまでの5~6年間にはほぼ3万トン台で推移)が続くよう

になっています。そのため、自国産のシェアが近年は一転して増大する兆しがみられ、自給率の上昇（3～4割）へと繋がっている状況にあります。

それでは表2より、我が国の国別ソバ輸入の変遷をもう少し詳しく見ていくことにします。

表2 日本の国別ソバ輸入の推移（2019～23年）

国別 品別	中国				ロシア				アメリカ	
	玄ソバ		抜き実ソバ		玄ソバ		抜き実ソバ		玄ソバ	
項目	輸入数量 トン	単価 円	輸入数量 トン	単価 円	輸入数量 トン	単価 円	輸入数量 トン	単価 円	輸入数量 トン	単価 円
2019	18,877	62.3	39,295 (51,772)	60.33	8,863	47.56	1,378 (1,816)	53.15	16,847	92.05
2020	10,682	72.53	29,476 (38,835)	75.67	5,248	62.65	0	—	12,752	90.17
2021	5,028	103.97	34,311 (45,206)	114.6	8,035	75.95	2,210 (2,912)	112.81	11,721	95.91
2022	6,136	133.53	35,961 (47,379)	151.31	8,147	100.98	830 (1,094)	165.86	12,905	123.57
2023	8,879	134.11	39,653 (52,244)	144.18	6,552	92.97	3,160 (4,163)	129.21	12,012	167.01

注1：単価は日本円、CIFキロ当たり。

2：（ ）内の数値は、抜き実ソバを殻付き（玄ソバ換算）に割り戻すための換算率を75.9%として算出。

出所：財務省貿易統計に基づき作成

表2で示したように、過去5年間（2019年～23年）の主要国別実績をみると、毎年外国から輸入されるソバの総量に関しては、概ね玄ソバで3～5万トン、抜き実（ムキミとも言う）ソバで約4万トン、合わせて合計8～9万トン程度に上っております。また玄ソバの主要輸入国の中では、トップの中国とそれに次ぐアメリカの順位に変動はないものの、近年は既述の通りロシアからの参入が際立つようになってきているのが特徴的です。概して輸入物の大体6～7割が中国産で、北米（アメリカ）産が1～2割、ロシア産が1割未満のシェアをそれぞれ占めているとみられます。

以前にもお伝えしましたが、従来は外国産のソバ輸入量と言えば、我が国の輸入統計品目の「そばの実（殻付）」のことを指し、これが玄ソバの数量と理解されてきた次第です。しかし、玄ソバに替わって殻を取り除いた抜き実の状態に加工して輸入される割合が段々と増えてきたことに鑑み、今からもう10年以上前の2010年（平成22年）1月よりそれまでの玄ソバの「そばの実（殻付）」に加え、新たに「そば（抜き実）」を計上し、「その他の加工穀物（そばのもの）」として統計品目が新設されるようになりました。つまり、ソバの抜き実の動向についても推計できるようになったのです。それ故に、今日では「殻付」と「抜き実」のほか、全体の「そばの実」も数量が把握できるようになっております。

なお、玄ソバを抜き実加工する際の歩留まり重量は75.9%程度とされていることから、ここでは「抜き実」を殻付き換算（玄ソバ換算）するための割り

戻しの換算率を同じく 75.9%としました。

そこで改めて表 2 を見直してみると、我が国ソバ市場における最近の輸入物の総合的な特徴としては、下記のような諸点が列挙できます。すなわち、

- ・ 中国からの輸入でまず目につくのは、玄ソバが著しく減少した反面、その代わりに今や抜き実ソバがそれを圧倒して大きく伸びていること。
- ・ 中国への貿易依存度が相対的に下がっているのを受け、同国産の比重が前と比べれば徐々に低下してきていること。
- ・ ただ、直近の 2023 年では、前年と同様、中国からの輸入が玄ソバ、抜き実ソバとも増大を見せていること。
- ・ ロシアからの輸入では、直近の 2023 年に玄ソバが前年より 2 割近く減少したものの、抜き実ソバの方は逆に 3.8 倍増と顕著な伸びを示したこと。
- ・ 我が国はウクライナ侵攻という国際情勢の変化を受けて、ロシアを貿易上優遇する最恵国待遇の地位から除外していましたが、中国産と比べ価格的に割安なため、一部の製粉会社がロシア産の調達に動いたとみられること。
- ・ こうして価格面に関して言えば、大部分を占める中国産の新物（2023 年産）の輸入増加による反落に加え、最大産地のロシア産の輸入が割と増えたことなどが主に影響し、それらの流通増加が我が国における 2023 年産の間屋卸値（東京地区）の下押し圧力になったとみられること。
- ・ 特に中国産（北方・大粒）玄ソバの卸値については、2024 年 2 月現在、麻袋 1 俵（45 kg）当たり 9,000 円～9,500 円（注：1 キロ当たりでは 200 円～211 円）と、2022 年産に比べ 1 割ほど値下がりし、安価になっていること。なお、2022 年産は比較可能な 1997 年以降、新穀が出回り始めた時期としては最も高かったと言われる。
- ・ ただ、アメリカからの輸入物の場合、近年は概ね 1 万 2 千トン前後の規模で横ばいの状態が続いてきたが、2023 年には若干の減少を余儀なくされたこと。
- ・ その背景としては、主産地の米ワシントン州などの生産者が収益性の高い牧草やトウモロコシ等へ転作し、玄ソバの生産量が減少傾向にあるとみられること。
- ・ このため、2023 年産の北米産（マンカン種・大粒）玄ソバの卸値は、前年産の出回り時と比べて 2 割近くも上昇し、比較可能な 2008 年以降では最高となる 1 俵 1 万 1,500 円前後（注：1 キロ当たりでは 244 円～267 円）に上ったこと。

～以上、別図（2023年11月25日付『日本経済新聞』）参照のこと。

これら外国産の輸入状況のほか、国産ソバの生産動向に目を転じると、2023年（令和5年）の動きの中で際立って見えるのは、作付面積や収穫量ともに全国第1位で国産玄ソバの実に4割超を単独で生産する主要産地の北海道が、夏場の猛暑などの天候不順による影響から、総じて平年作よりも収穫量減に追い込まれるに至ったことです。とりわけ北海道産の中でさらにその4割を占める空知・上川地方（幌加内地区を含む）においては、例年にな

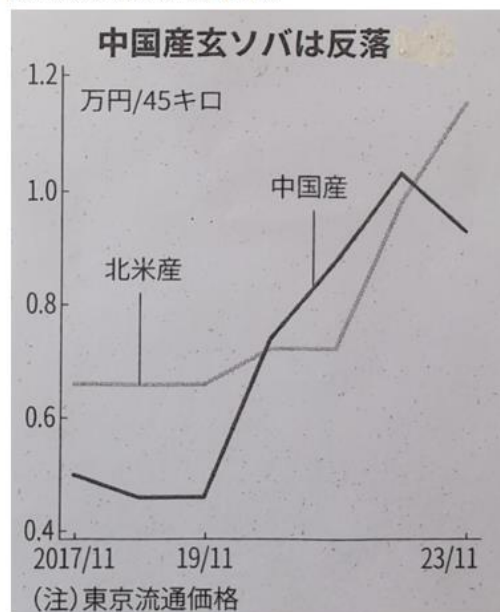
い暑さに見舞われ昨夏に発生した高温障害に加え、局地的な大雨による河川の氾濫などの被害も影響し、最終的には大幅な減産が報告されております。

そうした中で特に耳目を集めているのが、中国産の値下がりという新たな事態を反映して、国内市場で流通量が比較的少ない国産玄ソバに対し、昨今では輸入品に比べて引き合いが多くなってきていることです。何故ならば、国産品の単価は中国品よりもまだ3割程度高いものの、それが2倍以上の価格差のあった2019年以前に比べると、相対的な値ごろ感が出ていることが背景にあります。実際、2023年産の国産玄ソバの製粉会社向け卸値（北海道産、東京地区）は、同年末現在、1俵（45kg）当たり1万2,500円前後（注：1キロ当たりでは256円～300円）で取引されています。これは、前年同期の2022年産の価格に比べると500円（4%）ほど高い水準にあり、しかも2019年以来では4年ぶりの高値を付ける水準にあるとも言えます。とはいえ、それでも過去のピーク時（近年は2018年頃）に比してその水準が大幅に下回っているからにほかなりません。

このように、アメリカ産を除く輸入物の流通価格の値下がりに伴う激しい争奪競争以外に円安による価格上昇なども手伝って、今日では外国産から玄ソバの“国産シフト”が徐々に起こっていると情報が伝えられております。外食需要の高まりで国内消費の回復機運も取り沙汰されている折から、果たして今後どう進展していくことになるのか、その動きの行方が極めて注目される所です。

（2024年3月10日記）

図：輸入物の玄ソバの卸値推移



出所：『日本経済新聞』2023年11月25日